

令和6年度事業報告書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

特定非営利活動法人 Oneself

I. 事業総括

今年度は「国際交流シェアハウスやどかり」を閉館する事態となり、団体運営も大きく変わった1年だった。躯体をはじめとする建物全体の老朽化を把握しつつも、もう数年は運営できるだろうと考えていただけに、平時に把握していなかった老朽箇所について指摘を受けた際は大きな動揺があった。移転に際して会員の皆様をはじめ、同じ兵庫区で活動する地縁団体や行政の方からも驚きやご心配の声をたくさん頂戴した。改めて多くの方に支えていただいたことを実感するとともに心から感謝を申し上げたいと思う。

シェアハウスは約10年間で留学生約200名・技能実習生や旅行者約1300名利用がしてくださった。(数字はどちらも実数) シェアハウス運営については、母国から家族や友人が遊びにきたときに学校の寮等では一緒に泊まることは難しく、せっかく穏やかな時間を過ごせるひと時に家族や友人はホテルに泊まらなければならないことを解決したいと考え、シェアハウスでありゲストハウスも兼ねられる施設が運営できないものかと考えた。また、気軽に海外旅行ができない国の留学生もいる中で、旅館業も取得し旅行者を受け入れられるシェアハウスにすれば施設内で国際交流ができるのではないかと考えた。現在は住宅宿泊事業法(民泊新法)があり、同じ建物内で生活者と宿泊者の利用動線を共有することができず、実質は「国際交流シェアハウスやどかり」のような形態で運営することはできなくなったが、運営開始当初はそれが可能だった。ただ当初は前例がないということで何度も衛生監視事務所に足を運び協議を重ねた。そのため、住宅宿泊事業法が整備された際には衛生監視事務所より「今後、移転等で場所を変えた場合は、今と同じようなシェアハウスはもうできませんよ。」と指摘があった。そういった経緯があったからこそ「国際交流シェアハウスやどかり」という場所、形態を守りたいと思い大切に運営してきた。築50年を超え建物自体が刻々と変わっていく中で「続けたい」という思いと「これ以上は継続が難しい」という思いが交錯し、度々スタッフと想いを話し合った。

苦渋の決断の末、シェアハウスを閉館し生活拠点で留学生と接することはなくなってしまったが、これからも市内の日本語学校等と連携をしながら安心・安全に生活できる環境づくり、そして多文化共生のまちづくりを目標に一步一步進んでいきたいと思う。生活拠点を共にしたからこそ、我々に残ったあらゆる経験とシェアハウス運営のノウハウを別の形で生かしていきたいと思う。

そういった中で今年度は兵庫区から受託し「外国人リーダー認定制度」を同区内で始動させた。同区内に住む留学生あるいは同区内の日本語学校に在籍している留学生を対象にリーダーになり地域活動をやってみたい人を募集した。神戸市にはすでに「多文化交流員」という主に外国人大学生が活躍する制度があるが、兵庫区独自のリーダー制度は初めての試みだ。留学生たちが自身のルーツを生かし、地域住民との交流のみならず、地域に住む外国人の方々のサポートができるようなリーダーを育成したいと考えている。今年度はわずか4か月ほどの活動期間だったが、7名の留学生にとって貴重な経験になったと思う。地域の方々からも顔と名前を覚えてもらい、活動エリアが変わっても地域の方々から声をかけていただけるリーダーもいた。同学生の中から数名はメンターとして来年度も活動を続けてもらい、後輩育成にも力を貸してほしいと思う。

来年度以降も地域連携を行い、外国にルーツを持つ方々へのサポートを実施する。留学生にとって学校とアルバイトだけではないさまざまな経験をしてもらい、何を学ぶのか、何のために学ぶのかを常に考え留学生生活を価値あるものにしてほしいと思う。

Ⅱ．組織運営

Ⅱ-1 会員数

- ・正会員…17 名（個人）
- ・賛助会員 2 名

Ⅱ-2 理事会及び定例会の開催

- ・総会 5 月に開催
- ・理事会 団体の運営方法及び事業に関する会議 状況に応じて開催
- ・定例会 理事及び正会員で事業に関する進捗報告及び意見交換を状況に応じて開催



Ⅲ．特定非営利活動に関わる事業報告

◆Oneself 明舞日本語教室

実施日：隔週水曜日 10：00～11：30

場所：みなくーる明舞（明舞キリン堂薬局 2 階）

学習者：8 名

担当者：日本語教師：1 名・ボランティア 2 名

【実施内容】

当教室も学習者（中国残留邦人）の高齢化が進み、定期お知らせメールへの返信や教室への出席によって学習者の安否確認を行なっているのが現状である。

本年度もテキストを使用した漢字・文法授業各 30 分、ラジオ体操・指体操、その他の活動 30 分の計 90 分を基本構成とした授業を行なった。また、恒例の地域の文化祭にも参加することができた。今年は好きな植物のカードと花の和名を毛筆にしたものを作成した。

撮り溜めていた写真から一枚を選ぶ作業、花にまつわるコメントや花言葉も添える作業、花の和名を調べる作業などいづれも楽しみながら取り組む姿勢が見られた。次年度目標は学習者から要望が多かったものに焦点を絞った。健康・医療関連の語彙を中心に、生活に関わる微妙でわかりにくい日本語を集め語彙集を作成することである。全員で共有できる中国語対訳の語彙集を作成し、それを使ってレベルにあった会話スタイルを学習者自身で作り上げることを到達点としたい。

また今年度は 1 月 18 日に兵庫県国際交流協会が開催された「日本語教室実践持ち寄り会」ではポスター発表をさせていただいた。中国残留邦人のクラスは他エリアでは事例があまりないようで多くの質問を受けた。11 年を迎えた日本語教室運営ではあるが、他団体の皆様との意見交換は学びも多く、大変貴重な時間となった。



【異文化交流事業】

◆民族衣装ファッションショー（はっぴいひろば）

実施日時：2024 年 6 月 8 日（土曜日）

実施場所：湊川公園

参加者：参加者 26 名・スタッフ 4 名

【実施内容】

留学生は 8 名、フィリピン国籍の方 4 名、日本人リメイク着物の方 14 名 計 26 名で参加。

兵庫区内には日本語学校が 4 校あり、特にベトナム人やネパール人外国人留学生が増えている。兵庫区から受託した「なんでも相談窓口」で生活マナー啓発やトラブル等への対応を進めるとともに、外国人留学生と学生や地域等との交流の場を設け区内に住む留学生の母国に関心を持ってもらう。「交流」という双方向コミュニケーションにはまだ抵抗がある地域住民の方々を含めて、まずは「見る」というコミュニケーションの機会を得ることで、今後の双方向コミュニケーションに役立てることを目的とし「はっぴいひろば」に参加させていただいている。

今年度は新たに着物をリメイクし、バングラディッシュの男性衣装とフィリピンの女性衣装を製作した。またファッションショー参加者も昨年度とはメンバーも数名変わりカメルーンからの留学生やフィリピンの方も加わってくれた。

今回のファッションショーは観客席からスタートすることができ、地域の方々により近いところで各国の衣装を見てもらうことができた。そして見学されている方々とわずかではあるが留学生がコミュニケーションをとれるように留学生達には各学生の母国の国旗を（旗の裏にはそれぞれの国の紹介や本人からのメッセージを書き）持ってもらい、客席にいらっしゃる方々に手渡した。壇上に上がってからは若干の緊張を感じ取ったが、留学生が自身のルーツである民族衣装を地域の方々に見ていただける機会を存分に楽しんでいる様子だった。

こういったショーにとどまらず、会話をし、普段から接点を持てるような双方向コミュニケーションを目標に引き続き活動したい。



【令和 6 年能登半島地震支援】（公益財団法人公益推進協会助成）

◆外国にルーツを持つ方々への食糧品支援及びストレスマネジメント

実施日時：2024 年 6 月 17 日（火曜日）

実施場所：金沢大学

【実施内容】

①食糧品提供

能登半島地震で被害を受けた外国人技能実習生等、外国にルーツのある方を対象に宗教的配慮等が可能な食糧品や日用品の提供を行った。ムスリムを中心とした食糧品提供となったが、同じムスリムでも東南アジア・南アジア・エジプト等のエリアが違うことで食糧品もまったく違うため、国別で食糧品を集めた。



また金沢大学と連携が決まってからは、留学生全体への支援を行いたいという申し出があり、中国やベトナム等の留学生にも対応できるよう食糧品を調達した。I マイノリティに対する食糧品提供。主にハラール・ヒンドゥー教・ヴィーガンの外国人留学生に対して母国の食糧品を提供する。60 人分を用意し、事前に神戸から金沢大学に発送。食糧品提供ができたのはタイ・フィリピン・マレーシア・ベトナム・ネパール・バングラディシュ・メキシコ・アメリカ・中国・インドネシアの留学生合計 62 名。



②こころのケア（ストレスマネジメント）

神戸学院大学の臨床心理士の方と神戸で打ち合わせをし、進め方等は PPT にまとめ、英訳をつけて準備。当日は個別の相談だと参加人数によっては臨床心理士の方の負担も大きいため集団ストレスマネジメントケアとした。



（金沢大学保健管理センター 担当者の御感想）

当初、留学生に食糧品提供を行いたいという申し出に対し、金沢市内は地震による大きな混乱がなくなったことを神戸市の方は知らないのかと思った。大きな混乱がなくなった金沢市内でなぜ食糧品提供のような緊急支援が必要だと思われるのか困惑したところもあった。

しかし、今回の食糧品提供を間近で見て、外国人留学生が母国の味を思い出すものを手に入れることは心のケアになることを実感した。会場で母国の食料品を見たときの学生の顔はとても嬉しそうで、友人に食べ方を紹介したり、吟味して食糧品を選んだり、ほっとした時間を提供できたと思う。また食糧品を取りに来た学生に声をかけると母国の親戚から「あなたは金沢にいるから大丈夫でしょ？」と言われ「怖かった」ことを伝えられないこと、自身の体験を理解してもらえなかったと話す学生がいた。また「SNS で自分がいる石川県の様子を見てショックを受けたり、日本にいたことが怖いと思ったりしていることを誰にも言えなかった。」という留学生がいた。今回の活動を通して、安易に食糧品提供を緊急支援だと結びつけるだけではなく、外国人にとって慣れ親しんだ味を提供してもらうことはリラックス効果や心の安定になることを職員一同理解できた。同じ被災者として大きな被害を受けた珠洲市や能登町等の地域の方にも届けてほしいと思う。

（ストレスマネジメント講師の御感想）

友人と誘い合って参加し、一見明るそうな学生も、ストレスチェックでは高い値が出ていた。特にウクライナ人留学生は個別サポートが必要なレベルだったので金沢大学の先生に引き継ぎを行った。リラックスできる呼吸法や物事の考え方等、サポート後も自分で継続できるようなメンタルケア方法を教えたので、日常生活で役立ててほしい。

日本人もそうだが「私よりももっと大変な人がいるから」「ストレスが溜まっていることを誰に相談したらいいかわからない。カウンセリングや精神内科と聞くとそこまでの状況ではないと躊躇してしまう」という声がよくある。日本ではまだまだ臨床心理士に話をすることは特別なことというイメージがあるようだが、欧米では歯医者の定期メンテナンスに通う感覚でカウンセリングを受けることもあるので、留学生にも「特別なことを話す必要はないよ」というイメージを持ってもらうことに配慮した。

（課題）

今回、金沢大学での連携を皮切りに石川県で地震の被害が大きかったエリアにサポート内容や連携を依頼するも、最終的には音信不通になることがほとんどだった。外国人が住むエリアがかなり限定的であるため、行政機関に連絡をして支援を行いたい旨を伝えると「日本人がどう思うか」という話をされる方が多かった。

市役所や役場内に多文化共生課があるケースもあり、平時から専門的に外国人支援を行っているわけではないため「非常時において、市（村）として外国人のみへの食料品提供等をサポートすることはできない」と回答があった。

災害時に要配慮者とされるのは高齢者や障がいをお持ちの方をはじめ外国人もあてはまる。都市部とは違い、地方都市においては同国出身者のコミュニティが十分形成されているわけではない。そういった外国人が非常時に孤立し、サポートがない状態では都市部へ流出してしまうだろう。日本社会全体で労働力不足が深刻になる中で地域における外国人理解（文化理解）を進める必要がある。

【定住外国人雇用自立支援事業】

◆国際交流シェアハウスやどかり

事業終了日：2024年11月30日

事業所所在地：神戸市兵庫区中道通 2-2-11

約10年間で留学生約200名・技能実習生や旅行者が約1300名利用して下さった。（数字はどちらも実数）

シェアハウス運営については、母国から家族や友人が遊びにきたときに学校の寮等では一緒に泊まることは難しく、せっかく穏やかな時間を過ごせるひと時に家族や友人はホテルに泊まらなければならないことを解決したいと考え、シェアハウスでありゲストハウスも兼ねられる施設が運営できないものかと考えた。また、気軽に海外旅行ができない国の留学生もいる中で、旅館業も取得し旅行者を受け入れられるシェアハウスにすれば施設内で国際交流ができるのではないかと考えた。現在は住宅宿泊事業法（民泊新法）があり、同じ建物内で生活者と宿泊者の利用動線を共有することができず、実質は「国際交流シェアハウスやどかり」のような形態で運営することはできなくなったが、運営開始当初はそれが可能だった。ただ当初は前例がないということで何度も衛生監視事務所に足を運び協議を重ねた。そのため、住宅宿泊事業法が整備された際には衛生監視事務所より「今後、移転等で場所を変えた場合は、今と同じようなシェアハウスはもうできませんよ。」と指摘があった。そういった経緯があったからこそ「国際交流シェアハウスやどかり」という場所、形態を守りたいと思い大切に運営してきた。築50年を超え建物自体が刻々と変わっていく中で「続けたい」という思いと「これ以上は継続が難しい」

という思いが交錯し、度々スタッフと想いを話し合った。

苦渋の決断の末、シェアハウスを閉館し生活拠点で留学生と接することはなくなってしまったが、これからも市内の日本語学校等と連携をしながら安心・安全に生活できる環境づくり、そして多文化共生のまちづくりを目標に一歩一歩進んでいきたいと思う。生活拠点を共にしたからこそ、我々に残ったあらゆる経験とシェアハウス運営のノウハウを別の形で生かしていきたいと思う。

【物価高騰による留学生支援事業】

◆やどかり給付型奨学金プログラム

〈事業趣旨〉

留学生は週に 28 時間までアルバイトが可能な「資格外活動許可」を持っているが、日本語学校の学費支払いと進学先の入学金支払いが重なる「2 年生の秋」は多くの留学生が生活費が足りず厳しい状況におかれる。中には資格外活動許可の範囲を超えてアルバイトをし、成績悪化や在留資格の取り消し等「学ぶ」ために来日したのにも関わらず「学べない」環境に陥ってしまう。この「2 年生の秋」を支えるために「給付型奨学金プログラム」を設立した。

また新型コロナウイルス感染症によりアルバイトが減少している留学生も多い。進学を希望する留学生からは「試験に合格しても学費が払えるかわからない。」「入学金の納付期限があるのにアルバイトが減らされて払えるかわからない。」という切実な声が多く聞かれた。そこでこれらの課題を解決するためにコロナで困窮する留学生を対象に給付型の奨学金を支給しコロナ禍でも「学ぶ機会」を失わない支援が必要であると考えた。

〈2024 年度給付型奨学金スケジュール〉

募集期間 5. 1～5. 31

一次選考：書類選考（小論文及び日本語学校への出席率）

二次選考：地域活動（留学生版トライやるウィーク）期間：8. 7～8. 31 のうち 2～3 回

三次選考：最終面接 9. 15（日）10：00～

「留学生版トライやるウィーク」振り返り：10 月 2 日（水）14：30～

〈一次選考〉

日本語学校出席率証明書の提出・小論文試験

〈二次選考受入先〉順不同

兵庫区役所

神戸市立兵庫図書館

神戸市環境局

株式会社バンダイナムコアミューズメント

株式会社神戸マツダ

〈三次選考〉

個人面接



〈二次選考事例～神戸市環境局～〉

今年度からは企業が抱えている問題点を留学生と共に解決していく課題解決型を入れた。

また、留学生が日常生活を送る上でゴミ出しルールがわからなく、地域住民の方との間で思わぬトラブルとなるケースもあり兵庫環境局の講義を2日間必須とした。環境局からは参加する留学生の国のゴミ事情について聞かせてほしいとの課題が出され、1日目は留学生より自国のゴミ出しから収集に至るまでの説明を行った。ごみの分別もなく山積みされた国、分別されているのは都会だけ等、生活環境がこれほど異なる国から神戸市に来たらゴミ出しルールは惑うだろう。と環境局の方は言われていた。

その後はパッカー車のゴミ収集の状況を環境局の事業所内で再現し体験。

2日目は神戸市にはゴミ出しルールがあることを「知る」、ゴミ出しルールを何故守るかを「学ぶ」、学んだことを友達や次に来る留学生たちに「伝える」という講義を受け、留学生たちはゴミステーションに啓発ワンポイントメッセージを作成する作業に取り掛かり、後日自国の言葉を併記し環境局に提出することで無事課題解決型トライヤルを終了した。



〈奨学生3期生からの近況報告〉

私は昨年度このプログラムに参加しました。

私の大学生活や奨学金プログラムでの経験についてお話ししたいと思います。

大学生活は毎日が新しい発見の連続です。私は現在、心理学を専攻しており、人の心の仕組みや行動について深く学んでいます。授業や課題は確かに大変ですが、人々の思考や感情の理解が深まるたびに学ぶ喜びを感じています。また、大学に入る前に兵庫図書館でボランティアとして活動していた経験が、今非常に役立っています。ボランティア活動を通じて敬語を鍛えたり、お客様との接し方を学んだりしました、もちろん日本語の流暢さも鍛錬できました。

奨学金プログラムに参加して本当に良かったと思うところは、自分の成長を実感できることです。このプログラムは単に経済的な支援を受けるだけでなく、自分自身を高めるための多くの機会を提供してくれました。例えば、リーダーシップを発揮する場面や、新しいスキルを学ぶためのワークショップに参加することで、自分の視野が広がり、多くのことを学びました。

ちなみに、大学生活で楽しいことの一つはサークルです。私は今、軽音部で活動しています。音楽が好きな仲間たちと一緒にバンドを組んで練習し、ライブに向けて曲を作ったり演奏を磨いたりしています。最初は緊張していたライブ演奏も、回を重ねるごとに楽しめるようになりました。また、部員同士の交流を通じて、音楽の知識や技術だけでなく、チームワークの大切さも学びました。音楽を通じて仲間と一緒に成長していけるのは本当に素晴らしい経験です。

最後に、今年の後輩の皆さんへ伝えたいことがあります。奨学金プログラムは確かに挑戦の連続かもしれませんが、その分、大きな成長と学びの場でもあります。困難に直面したときこそ、自分を信じて一歩ずつ前進してください。

◆外国にルーツを持つ方々へのインターンシッププログラム構築事業

〈助成先〉一般財団法人日本民間公益活動連携機構（JANPIA）

〈実施期間〉2024年4月1日～2025年2月28日

〈実施背景〉



新型コロナウイルス感染症拡大で入国できなかった留学生が新規入国再開後に日本語学校へ入学し、同留学生の卒業が2024年3月となるが進学先が未定のまま卒業を迎える留学生が多い。日本語学校卒業後の進学先である専門学校や大学で早いところでは9月の試験で定員に達し募集を終了したところもある。留学生が願書を取り寄せようとしたところ、募集終了を告げられたケースがある。留学生の受験スケジュールが把握できていなかったことが原因である。しかしこの原因を生んだもう一つ原因として、新規入国再開後に一気に入国した留学生を日本語学校が対応しきれず、十分なキャリア教育や進学指導を実施していないことが挙げられる。日本語学校が対応できていない理由としては、コロナ禍で学生数が大幅に減ったため非常勤講師の雇止めが相次ぎ、日本語教育以外の分野に雇止めの講師たちは就職してしまった。新規入国再開後も教育現場に講師は戻らず、結果的に大幅な人材不足が生じ、留学生に十分な学生指導ができていないのが現状である。そのため留学生は日本語学校卒業後のビジョンを描けぬまま卒業時期に至ってしまった。神戸市内のある日本語学校に通う留学生のうち30%が卒業後の進路が未定である。また、これまで当団体の「やどかりのがっこう」に参加した学生で一番多かったミャンマー人の中には、進学を希望しているにもかかわらず進学費用がなく特定技能に切り替えなければならない日本に残れる手段がないケースも発生している。食料品提供時にミャンマー人にヒアリングし、「特定技能に切り替える際に希望する職種は何か」という問いに対し職種が答えられず「特にやりたい仕事はないが国へ帰れないので何でもいいから仕事がしたい」という回答が70%を超える。結果的にこのような留学生の意識と企業が求める外国人人材像や雇用条件にズレが生じる。

〈実施概要及び事業内容〉

1. 外国人が抱えている課題の解消…〈社会的課題〉家賃支払いの平均額は26,000円。一方でアルバイトは最低賃金で週平均15時間。そのため40,000円の収入で学費と生活費を捻出する。日本語学校の多くは半年分の家賃を前払いさせるため、学生の多くが資金難になるのが来日5ヶ月あたりからである。当団体に来館する相談者で一番多いのが2023.10入国。新規入国再開後に来日した学生のため日本語学校卒業は2025.3になる。しかし、すでに貯金はなく今年度後半の学費が未納というケースもある。

そのため①衣食住の緊急支援及び就労支援…シェアハウスの空室提供及び宗教上の配慮を含んだ食料品支援を行う。

2. 外国人を支援する団体活動の継続性の確保…〈社会的課題〉外国人留学生（特に日本語学校在籍者）のキャリア教育が十分行き届いていない。〈団体が抱える課題〉昨年度インターンシップ事業構築のためオンライン研修を受講し、団体に足りないスキルやノウハウが露呈した。一方でコロナ禍から始めたインターンシッププログラムには毎年留学生の受け入れを実施してくださる企業・団体もいて、当団体の新たな事業の柱として認知されてきた。そのため今年度はインターンシッププログラムをより確立させ認知度を高めたいと考えている。団体の柱となる事業構築のためには必要な人材育成を中心に行い、プログラムのクオリティを上げ継続的に活動できるようにする。そのため①英語・ミャンマー語で外国人留学生にキャリア教育ができる人材育成②インターンシップ先の開拓に必要な営業力・企画提案力を身に着けるための社会人プロボノの参画③介護・建設・農業・外食等の特定技能分野で新たなインターンシップの受入を実施可能な企業の開拓。

〈実施報告〉

留学生向けキャリア教育ワークショップ

今回の講座をやってみてわかったのは、進学準備は日本に来る前もしくは日本に来てすぐ始めないといけないという意識を持っている日本語学校の学生がほとんどだが、その大半が実際に進学準備の行動を起こしていないということだ。なぜかという知識もなければ進学準備のやり方を学ぶ機会もないからだと言う。

このような点から、今回の講座は非常に有意義なものだったと感じた。今回の講座のような情報を必要としている学生に必要な情報を届けられたと思う。

そしてこれからの進学準備に役立ててもらいたいと思う。

驚いた点として職業選択の考え方について留学生たちがちゃんと世界の産業のトレンドや産業の将来性をよく考えているということだ。自国の産業分野と日本の産業構造の知識から、日本でどのような産業な分野が大きいのか理解していたのには驚いた。

一方で職種が日本にいくつ存在するのかという質問をすると、数十～多くて数百というような回答が返ってきたことに対しては知識の浅さやリサーチ不足を感じた。また今回講座に参加してくれた学生たちの多くが将来にやりたい仕事が見つからないという学生達だったが、講座後に多くの参加者から、今後進路を考える役に立ちそうだとされたことに今回の講座の価値を見出した。

総括として2回の講座を通して、どちらの講座においても日本語学校では勉強しないこと、始めて聞いたことばかりで、とても今後の役に立ちそうだという声がたくさん聞けてこの講座をやって本当によかったと感じた。継続して留学生の進学支援、就職支援につながる活動をしていきたいと思う。



業務体験型インターンシップ事例～医療現場～

今回の体験型インターンシッププログラムは、留学生2名に対してそれぞれ1時間の事前面談も含まれていた。面談には病院側から3人（広報部2名、地域連携部1名）参加され、当日の内容を留学生に詳しく説明しておられた。留学生に課せられた作業内容は、シンプルなものではあったが、臨機応変なコミュニケーション能力や行動が必要な内容だった。

イベントは病院業務の一連の作業を参加型ストーリー形式で小学生に学んでもらうスタイルであり、病院側から医療従事者含め11名、消防署側から消防士10名の参加。指導を受けた子どもがそれぞれの役割を実演する様子を往来する一般の方々にも見学してもらったスタイルだった。留学生は、指導中に入り込んでしまう一般の方々や小さな子どもたちを静止しつつ、イベント内容の説明し見学へ誘導する役割を担った。

後半は未就学児の試着体験コーナーを担当し親子連れに声かけをし、試着したい衣装と一緒に選び、試着の手伝いを行った。留学生は常に姿勢を低くして目線を子どもたちに合わせ、優しく声かけを行っており、小さな子どもたちへの対応が非常にうまかったと思う。

広報の方からも「手際よく優しく接してもらえて、試着コーナーも時間が足りないほど人が集まり助かりました。」と感想をいただいた。また、病院側として検討中の外国人患者へのサービス拡充に関し、まずは病院側が留学生と関わる姿を院内・院外ともに発信していくため、継続したイベント参加やアイデアの提供を求められた。



チャレンジカフェ

実施背景として、今年度新たにインターンシップ先として新規開拓したホテル担当者から活動内容を打ち合わせしている際に「ホテル併設のレストランで接客をしてもらい、お客様のご要望に応えたり、必要なサービスを自分で感じとってもらい都度対応したりするスキルを身に着けてほしい」と言われた。

ホテルでのインターンシップを希望している学生はいたが、現状は大衆食堂及びテイクアウト専門店で働いている留学生在がホテルのレストランで働きたいという希望と現在のアルバイト



では同じ外食でも接客マナーがまったく異なるため、前回のようにインターンシップ前に実習が必要であると判断し、サービスや接客マナーを体験するプログラムを取り入れた。事前にホテル担当者から Oneself での実習中に基本的な接客用語やマナーを練習してきてほしいと資料を預かったのも、それを基に行った。

実習を受けた留学生からは「飲食店で働いているから在留資格変更は簡単だと思った。」という言葉通り、実際に学習が始まると注意されることが多く「何がダメなのかわからない」という困惑も多くあった。

また、ちらし配布や入店までの案内、帰られるお客様のお見送りなど、すべて一連の流れを学生達だけでやってもらった。前回とは違いスタッフは2名のみでクレーム対応が発生した時の場合と調理スペースで衛生面を疎かにしないかどうかの確認のみで担当するスタッフは前回よりも少ない人数で対応した。

事務所移転後に、喫茶及びテイクアウトどちらも可能なカフェをクリスマスに開催し、新たな場所での挑戦と地域住民に留学生の就業体験を行う団体・スペースであることをスタッフから説明し、認知度を上げるよう努めた。

〈受入担当者からの声〉

（業務体験型）

・インバウンドなどで外国人旅行者が増えているといっても、当社では外国人と接する機会が少ないので、外国人と交流ができたらいと思い受け入れました。こちらがやってほしいことを説明すると、すぐに理解してくれました。また作業も丁寧にやってくれて感心しました。従業員も緊張していましたが、すぐに打ち解けてコミュニケーションが取れていました。また従業員の中で意外とコミュニケーション能力が高いんだと新たな発見をすることもできました。機会があればまたぜひ外国人の皆さんと仕事をしてみたいです。

・技能実習生などのニュースを見ていると、外国人のイメージが決まっていたわけではなかったのですが、地域に外国人が増えていることもあり数日の体験であればと思い受け入れました。日本語で上手に会話ができる子も多いのだと驚きました。また、どうして日本に来たのか聞いてみると、家族のために家を建てたいという子や将来会社をつくりたいという子もいて、しっかり考えているんだと印象が変わりました。従業員と一緒に普段の業務を体験してもらいましたが、業務上での質問をしてくれたり、国との違いを話してくれたり、こちらも勉強になりました。

（課題解決型）

・自動車整備士として外国人雇用をすでに行っているが、今回は日本人社員しかいない部署で経験を積んでもらった。最後に自動車業界の課題や今後当社が目指すべき方向性などについて自由にプレゼンしてもらった。本当に自由な視点で発表してくれた。日本人社員は上層部がどう思うか気にしすぎるところがある。また、すでにあるものを要約したPPTを作るのは得意だが、広がりがないと思うことがあった。しかし、今回の受け入れで留学生が大きな広がりのある発表（自動車の販売価格や運転免許証の取得までの流れや費用についての発表）をしてくれたので、同世代でお互いに「そういった考え方もあるのか」という学びが生まれるような可能性を感じることができた。